

# 聴覚障がいのある学生の受け入れについて

荒井 隆行<sup>†</sup>

<sup>†</sup>上智大学理工学部 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

E-mail: <sup>†</sup> arai@sophia.ac.jp

あらまし 過去に聴覚障がいのある学生を2名ほど受け入れた経験から、その支援について述べる。大学のサポート体制としては、講義における情報保障としてノートテイクや手話ボランティアの仲介等があった。専門の講義では数式が多く登場することもあり、特に大学院になるとボランティアは理系学生が中心となった。また研究室の中では、メンバーによるサポートが自然な形で行われ、チームワークにより国際会議を含む学会発表なども問題なく対応できた。

キーワード 聴覚障がい、高等教育、情報保障、研究室

## 1. はじめに

今までに聴覚障がいを持った学生が2名、私の研究室に所属した。

1名（以下、学生A）は2歳1ヶ月で難聴と診断された。このとき、右耳が60 dBHL、左耳が105 dBHL。2歳11ヶ月～4歳8ヶ月の間に繰り返し聴力の変動があり、その後、右耳95 dBHL、左耳105 dBHLに落ち着いた。重度感音性難聴。大学入学（1996年）から大学院修士課程まで6年間在籍した。

もう1名（以下、学生B）は6歳のときに左右の聴力レベルが約60 dBHL、その後、徐々に聴力が低下し、33歳のときに左右の聴力レベルが100 dBHLを超えた。重度感音性難聴。社会人入学（2001年）で、大学院博士課程に4年間（そのうち1年間休学）在籍した。

## 2. 障がいのある学生を受け入れるにあたって

聴覚障がいのある学生を2名、受け入れるにあたって、それぞれの状況を以下に説明する。

### 2.1 学生Aの場合

入学を許可される時点で、大学からのサポートが得られない可能性も告げられていたが、すでに他学科に聴覚障がいを持つ学生が在籍しており、ノートテイクなどのサポートを受けていた。当初、有志の学生団体が中心となってノートテイク・手話通訳ボランティアの斡旋が行われていた。そこに、大学側からも紙とペンの支給やボランティア募集の窓口を設置するなどの協力体制が加わり、徐々に大学主導で運営されるように業務内容が移行されていった。

### 2.2 学生Bの場合

大学院博士課程への受け入れであったため、受け入れ教員である私との話し合いが行われた。研究テーマが補聴器のためのアルゴリズムの開発であるなど、私の研究室のテーマとも一致したため、問題なく受け入れを決めた。修了に必要な講義科目は少なく、研究室での研究活動がほとんどであった。

## 3. 障がいへの対応

教員にも協力を呼びかけ、講義中は「背を向けて話さない」、「口はハッキリと動かして話す」などを徹底していただいた。後年になると、学生Bのために大学がFMワイヤレスシステムを購入。場合によっては、教員がマイクを持ち、ワイヤレスシステムを通して学生の補聴器に直接音声を届けることも可能となった。また、講義における情報保障としてノートテイクや手話ボランティアのサポートがあった。専門の講義では数式が多く登場することもあり、特に大学院になるとボランティアは理系学生が中心となった。

大学からの「講義保障」の支援は十分とはいえなかったかもしれないが、学生Aは周囲に助けられながら学生生活を乗り切り、本人の努力も大きく、首席で学部を卒業した。一般教養の講義ではノートテイクや手話通訳が十分だったが、専門科目ではそこまでの体制は整わず、講義後に個人的に教員や先輩に説明をってもらうなどのサポートを受けながら学習を進めたようである。

研究室の中では、積極的に手話を覚えようとする仲間もおり、PC要約筆記などのサポートが自然な形で行われた。指文字だけでも分かる仲間がいるとちょっとした発表時にも随分助かったようである。二人とも補聴器と口話（lip reading）を併用して、日常会話ならばある程度聞き取れる上、音声発話には問題がなかった。研究室のミーティングでは、発言者はハッキリと話し、要点はノートテイク、数字やアルファベット等には指文字も併用しながら進められた。

私の研究室は、音声、聴覚、音響などをテーマとして扱っていることから、もともとそういうことに関心の高い学生が多い。研究室メンバーの「伝えたい」「分かりたい」という気持ちからバリアフリーな環境が自然に築かれ、チームワークにより国際会議を含む学会発表なども問題なく対応できた。本人が口頭発表をする際には、プレゼンテーションが終わると仲間が寄り添い、質問の内容を紙に書き留めて伝える。本人はそ

れを見ながら質問者に答えを返す。講演を聞く際も隣で要約筆記をするなど、「聞き取り」に関してサポートをした。ポスターセッションでは face-to-face のやり取りとなるので、質問を画用紙に書いてもらったり、ジェスチャーを交えて会話をしたりすることで質疑応答もできた。また、共同研究者と複数で発表することも多かったため、仲間の助けもあったようである。

私の研究室に2人が所属していたのは通算6年間で、3年目に当たる2001年に学生Bが入学した。学生Bは博士課程の社会人学生であり、活動できるのは週1日程度であったが、周囲の学生は以前から聴覚障がいを持つ仲間が身近にいたため、戸惑うこともなくごく自然に支援していたと思う。

#### 4. 支援の効果と課題

学生AもBも支援を受けながら努力を重ね、自分の希望したテーマで研究を遂行した。Aは、自分と同じ障がいを持つ人々に役立つ研究がしたいということで、卒業研究として聴覚障がい者に対する聞こえの改善を行った。その後大学院修士課程に進学し、8ヶ月のアメリカ留学を経験。現地の小学校でPCを用いたコミュニケーション能力を高める学習をサポートする傍ら、教材となったソフトウェアシステムを大学院で学び、日本語版教材の検討を行った。健聴児も聴覚障がい児も一緒に学ぶインテグレーションの教育現場では、構音時の音声器官の動きが分かるトーキングヘッド等を含んだ教材が使われていたが、その教材に感銘を受けぜひ日本にも紹介したいと修士論文にまとめた。

私の研究室が音声や聴覚などをテーマとしていることは先にも述べた。聞き取りやすい音声に加工する処理やその他の補聴処理などの研究を進めていることから、聴取実験は欠かせない。聴覚障がいを持った学生は実験協力者としても貢献してもらえることから、その存在意義も大きい。実験に参加、あるいは、参加せずとも「刺激音」を試聴してもらいフィードバックを得るなど、気軽にお願ひできる関係であった。また、学生Bの実験結果から興味深いデータが見つかり、新たな老人性難聴の研究テーマが生まれることもあり、彼らがいることで聴覚障がい者の視点に気づくなど、私を含めて周囲が学ぶことも多かった。

2人が所属したことで他の学生も貴重な経験をし、研究にも深みが増したと感じている。自分達の研究が社会の中でどのように役に立つのか実感できると、具体的なイメージがわく。必要性を感じれば自ずと研究にも熱が入るので、目的意識をもって取り組める。そのような考えると、研究室の仲間の温かい支援があったのは確かであるが、同時に、他の学生も聴覚障がいを持った学生から大きなものを得たといえる。

話を大学に戻そう。公共のバリアフリー環境は法令化もあり飛躍的に進んできたが、「教育を受ける権利」の保障に関しても、多様化するニーズの中で迅速な対応が迫られている。学生Aは大学院進学時に大学に要望書を提出したが、残念ながら在学中に十分な回答(対応)は得られず、個人的な努力と専攻内の配慮でボランティアなどを募ってきた。時間的・精神的にも大変な負担を伴うものであったと推察する。学生にとっては「今」が大切なのであり、時間は待ってくれない。対策に時間がかかりすぎるのは課題であるし、相談窓口や担当者などの組織化、解決へのシステムづくりをきちんと整備する必要がある。

また、講義保障という概念を全く知らずに入学したAは、2年先輩が道を開いていたおかげで教わることも多かった。まだまだ手探りの時期であったし、支援を必要とする学生が2人に増えたことでボランティアも2倍必要となり、新たな問題も浮上した。「入学してきた障がい者本人が望む・望まないに関わらず、また、大学としてサポートが可能かどうかに関わらず、様々なサポート方法があることや、各種学生団体の存在など、情報公開していただけると嬉しい」と述べている。様々な場で情報保障が叫ばれ、そのための技術も次々と開発されている昨今、情報を共有し、ボランティアの募集など必要に応じて学外とも連携を図りながら支援の輪を広げていく必要性を感じる。すぐに取り入れることは難しくても、先進校や他国の取り組みに学ぶところも多いだろう。

#### 5. その後

大学の窓口は1997年から2000年までは学生部、その後、学科や専攻で個別対応をしていたこともあったが、現在は学生総務担当の副学長を核とした体制で進められている。障がいを持つ学生が学生センターに相談すると、必要に応じて紙や筆記具、カセットテープなどハード面の補助が受けられる。通訳者の募集に関してはセンター内のボランティア・ビューローが仲立ちし、掲示やメール配信で学生たちにボランティアを募り、アレンジをする。また、啓蒙活動の一貫としてノートテイクや手話の講座、車椅子体験講座なども開かれており、その機能は徐々に強化されている。

大学構内では点字の案内表示も充実し、設備面でも視覚障がい者用PCやソフトが準備されたと聞く。物理的に学習環境を整えるだけでなく、教職員の意識を高め「心のバリアフリー教育」も進めていきたい。

#### 謝 辞

本稿執筆にあたりご協力下さった2人の元学生に感謝します。